

B型肝炎ワクチンの定期接種化について

平成28年9月放送

安藤 徹

この秋十月から、B型肝炎ワクチンの定期接種がはじまります。今年4月以降に生まれた赤ちゃんを対象に、生後2カ月から1歳までに3回の接種を行います。今回はこのワクチンがなぜ必要なのか、そしてその注意点についてお話しいたします。B型肝炎とそのワクチンについて正しく理解していただき、お子様に忘れず接種してください。

B型肝炎は、主に血液など体液から感染します。感染する原因としては、母親がB型肝炎感染者であり、出生時に感染する場合、または輸血などの医療行為によるもの、そして成人になってから性感染症として感染する場合の3つが主な原因です。



ウイルス感染の形として、感染後に、発熱や黄疸などの症状が現れた後に、肝炎が治る一過性感染と、ウイルスが肝臓の中で生き続ける持続感染、いわゆるキャリアといわれる状態があります。現在、日本ではB型肝炎キャリアは人口の約1%と推定され、百数十万人の人が罹っています。多くは乳幼児の頃に感染した人達で、今は自覚症状ありませんが、将来数十年の歳月を経て、そのうちのおよそ10%以上の人、慢性肝炎や肝硬変へ進展し、さらに約1%が肝癌に進行すると予想されます。赤ちゃんの内にワクチンを接種するのは、3歳未満の乳幼児期にウイルスに感染すると、キャリアになりやすいことがわかっているからです。そのため、30年ほど前から、B型肝炎のお母さんから生まれた赤ちゃんには、出生直後からワクチンを接種していました。その成果もあり、乳幼児のキャリアは著しく減少しましたが、現在は父親などの母親以外のB型肝炎キャリアからの感染が問題になっています。また性感染症としてのB型肝炎の広がりも問題となっています。それは欧米に多いタイプのB型肝炎ウイルスの流行です。このタイプのウイルスは、成人になってから感染した場合でも、持続感染となりやすく、国際化の影響もあり、最近では若年成人を中心に感染が拡大しています。そのような時代の変化に伴い、B型肝炎ワクチンを定期接種として、乳幼児全員に接種する必要が高まってきました。

この秋から接種対象のお子様には市町村からお知らせが送られてきます。忘れずに生後2カ月から他のワクチンと一緒に受けましょう。それから、お父さんやお爺さん・お婆さんなど赤ちゃんの身近な方がB型肝炎の患者さまの場合

は、日常生活のなかでウイルスが感染する可能性があるため、生後早期のワクチン接種が勧められます。産婦人科や小児科の先生にご相談いただき、早めのワクチン接種をお願いいたします。また、今年4月以前にお生まれになり、定期接種の対象とならないお子様も、費用は自己負担となりますが、これを機会に御兄弟と一緒にワクチン接種をしてください。

今回、B型肝炎が定期接種となる最大の目的は、乳児期から予防接種をすることにより、ウイルスキャリアになってしまうことを防ぎ、慢性肝炎や肝硬変、さらに肝癌を予防することです。肝癌が発症するのは、感染してから何十年も先のことですが、3回の注射によってそれが防ぐことができます。このワクチンは、すでに30年間、多くの赤ちゃんに使われており、優れた効果と高い安全性が証明されています。遠い将来の癌の発症を防ぐため、是非、赤ちゃんのうちにワクチンを接種してあげてください。